

遅れがちな高校生を支える英語の授業づくり

萩原 一郎

1. はじめに

ベネッセ教育総合研究所が行った「高1生の英語学習に関する調査」〈2015-2019継続調査¹〉によると、「学校の英語の学習にかかわることについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか」という問いに対する答えは、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合わせた割合が上位から「文法が難しい(80.4%)」「英語の文を書くのが難しい(77.2%)」「英語の発音が難しい(72.0%)」「単語を覚えるのが難しい(71.8%)」「英語のつづりを覚えるのが難しい(70.3%)」の順になっている。また、「英語が得意」とした生徒と「英語が苦手」とした生徒で差が大きい項目は、「英語のテストで思うような点数がとれない」「教科書の本文を理解するのが難しい」「英語の文を音読するのが難しい」が上位3項目となっている。

私は高校教師として38年間、6校の県立高校で英語を教えてきた。そのうち、中堅校が2校、大規模な新設校、複数の専門コース設置高校、総合学科の高校など遅れがちな生徒が多く学ぶ高校4校で教えてきた。本稿では、そのような私の経験に基づいて、上の「調査」にあげられた高校生にとって「難しい」8つの項目について、生徒にとっての「難しい」「できない」を「やればできる」という方向にシフトするにはどのような授業づくりをすればいいのかを考えてみたい。

2. 「英語の発音が難しい」「単語を覚えるのが難しい」「英語のつづりを覚えるのが難しい」→帯活動でワークシートを使ったペアワークを行い、言える単語を増やしていく

2021年4月から中学校で、2022年4月からは高校で新指導要領に基づく英語の授業が開始されており、語彙については中学校では1,600～1,800語の新語を、高校では1,800～2,500語の新語を扱うことになっている。指導する語彙数が以前と比べて大幅に増加しており、今後の中高の授業では語彙指導がきわめて重要になることは間違いない。上記の調査でも生徒がかかえる困難点の上位5つのうち3つが発音、単語に関するものである。一方、英語の文法や英語を書く力は習得にかなりの時間を要するが、単語に関してはどの生

¹ ベネッセ教育総合研究所 高1生の英語学習に関する調査〈2015-2019継続調査〉2019年
<https://berd.benesse.jp/global/research/detail1.php?id=5467>

徒にとっても努力を重ねれば成果が目に見えやすいことに注目したい。

2.1 単語指導の4段階を意識して練習する

授業の中では、教科書に出てくる単語やフレーズを日英対訳形式に構成したワークシートを使った練習をペア活動の形で行う。その際、ワークシートには教科書の新出語だけを載せるのではなく、中学校の既出語も含めて定着していないと思われる語を載せておく。意識的に同じ語句に何回も出会うように意図して作成することが重要である。以下は高校2年生の授業で使用したもの。英語以外の科目でも困難をかかえている生徒が多く在籍した高校でのものなので、あまりに基本的な語を取り上げていることに驚かれるかもしれないが、私が記録していたある日の授業日誌を見ていただきたい。

1年生の授業では、again, wifeを知らないことに愕然。最近も授業をやっている、接続詞whenの意味が4月以来10数回出てきているのに分からない生徒がいたり、must, leaveの意味を知らない生徒もいるという現実である。

生徒の実態に寄り添って授業実践を積み上げていくことは相当な根気を要するが、生徒ができない、分からないところまで教師が下りていき、そこからスタートする必要がある。

Lesson 3 Saving Native Tongues (2)

【動詞・助動詞編】

- | | |
|--|-------------------------------------|
| 1. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> learn | 1. <input type="checkbox"/> 覚える, 学ぶ |
| 2. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> set aside... | 2. <input type="checkbox"/> ~をとっておく |
| 3. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> punish | 3. <input type="checkbox"/> 罰する |
| 4. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> speak | 4. <input type="checkbox"/> 話す |
| 5. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> spoke | 5. <input type="checkbox"/> 話した |
| 6. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> begin to... | 6. <input type="checkbox"/> ~しはじめる |
| 7. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> began to... | 7. <input type="checkbox"/> ~しはじめた |
| 8. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> worry | 8. <input type="checkbox"/> 心配する |
| 9. <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> can | 9. <input type="checkbox"/> ~できる |

ワークシートで練習する際、以下の4段階を意識する：

- ①英語を音声化できる
- ②英語を見たら日本語で意味が言える
- ③日本語を見たら英語で言える
- ④日本語を見たら英語で書ける

遅れがちな生徒にはこのステップが重要である。この順序を無視して、発音ができない単語について、いきなり5回～10回書かせて提出させるという指導が行われがちであるが、これは避けたい指導である。まずは①の段階で読める英単語を増やしていきたい。中学校の教科書では新出語について、発信語彙を太字で示し、受容語彙と区別していること

が多い。中学校でも高校でも意味が分かる単語，そして次には英語で言える単語を増やしていく方向を目指したい。授業内では③までしっかりできるようにしておき，④を行えない場合は家庭学習にまかせるという指導を行う。

2.2 フォニックス的な指導を取り入れる

教科書の新出語もプリントやカードを見せて，いきなり“Repeat after me.”するのではなく，まず生徒に読ませてみよう。いつも教師のあとに繰り返しているのでは，新出語を見たときに，自力で何とか音声化していく力は育たない。私が授業でやっていたのは以下のようなやり方である。ペアで奇数番号の単語，偶数番号の単語の担当を割り振り，単語シートの1番から順番に交互に読んでいき，二人で協力しても読めない語については，教室全体で取り上げる。生徒が読めない語を教師はあらかじめ予測しておき，同じ綴り字を含む既習語を用意しておくことが肝要である。

例えば，*reason*が読めなければ，中学校で必ず出会っている*season*を読ませ，*s*を*r*に変えて*reason*を読ませる。*glare*が読めなければ，既出語の*share*, *care*, *rare*を板書またはカードで示して生徒に読ませて，*-are*の発音を確認し，*glare*も自力で読めることを確認する。*Ireland*が読めなければ，まず*fire*を示して，*f*を消し，*ire (Ire)*を読ませてから*land*を足して*Ireland*を発音させる。*divide*であれば，*side*を読ませ，*s*を*v*に変えて*vide*を読ませ，その前に*di-*を足して*divide*と読ませる。このように既習語を手がかりにすれば自力で読めるのだという自信を生徒に与えたい。教師がすることは，そのお膳立てをすることである。

2.3 アクセントをおおげさに

長い単語の場合，アクセントの位置を把握して，しっかりと強弱をつけて発音できるようにしたい。その場合，強勢の記号（^ˈ）をつけさせるだけでなく，英単語の強勢パターンのどれに当てはまるかを考えさせ，リズムカルに繰り返させる。例えば，3音節の語であれば，強勢パターンは（. . ●），（. ● .），（● . .）のいずれかになる（当面は第二強勢については教えていない）。これを2番目のリズムであれば，「ダ，ダー，ダ」のように言わせ，続いてこの強勢パターンにあたる*musician*, *tradition*を言わせる。その際，アクセントが置かれぬ音節を弱くあいまいに言う指導も大切である。

高校の中級以上になれば，単語の語尾を見ればアクセントの位置が分かるという感覚を，特に接尾辞の指導と合わせて育てていきたい。（例：*attraction*, *artificial*）

2.4 授業の中で音声で覚え，「自学ノート」で書く練習を

個々の単語の発音ができるようになったら，①教師のあとについて繰り返し，②ペアワークで確認，③教師が日本語で単語の意味を言い，生徒はそれを英語で発音する，④日→英で言えるように2分程度の暗記タイムをとって覚える，⑤それをペアワークで確認する，と徐々に負荷をあげていく。ただし，すべての過程を1回の授業で行うのではなく，帯活動的にいくつかの過程に分けて少しずつ積み重ねていく方が効果的である。高校生の記憶力は驚くほど高いものがあり，集中すれば英語が苦手な生徒でも授業内でかなり日→英で言えてしまう。単語を書く練習はほとんど授業内でとれないので，家庭学習にまかせ

ている。ワークシートを点線で縦に山折りにしたうえで、日本語を見て、英語で発音したあと一度書いてみる。間違っていた場合、発音しながら3回書くというのが基本ルールで、「自学ノート」にやることになっている。ノートの点検は教師の負担にならないように、2列ごとに集めるなど無理がない範囲で進め、励ましのコメントを生徒に返したり、具体的な学習法のアドバイスを与えるとよい。せつかく言えるようになった語句を忘れないように、授業で練習したその日のうちに書く練習をするように指導しているが、取り組みについては個人差が激しい。

2.5 英単語指導に潤いと楽しさを

語彙には2つの側面があり、「語彙の広さ」とは、たくさんの英単語を知っていること、語彙力を量ではかるものである。一方、「語彙の深さ」とは、それぞれの単語について、使い方など様々なことを知っていることで、語彙力の質をはかるものである。授業内の単語学習はどうしても「広さ」に重点が置かれ、機械的な練習になりがちである。無味乾燥な暗記物という気持ちをいだかせず、生徒の知的興味をかき立てるために、単語に関する背景知識、語源、文化的な側面、そこから生まれた表現などを授業内で紹介したり、英語通信などを利用して生徒に伝えるようにしたいものである。appleが出てきたら、Adam's apple（「のど仏」聖書から）という表現を紹介したり、apple polisher（「ゴマすり」と対比）、an appleとappleの冠詞の有無での意味の違い、英米ではappleを皮をむかずに食べるという食文化などを紹介すると英単語学習の奥の深さにふれさせることができる。

3. 「教科書の本文を理解するのが難しい」

→音声を重視し、教科書の内容をビジュアルに示し、イメージをもたせる

遅れがちな生徒が多い高校では、生徒が個別に取り組めるように、プリント学習が多用される。ブランクのあるプリントを配布し、授業内で空所を埋めて提出をさせることで授業成立をはかる。教師はプリントを点検し、次時に返却をする。あるいは、黒板に教科書本文を1行おき書き、そこに語句の意味や日本語訳を補っていく。生徒は板書をノートに写すことで、きれいなわかりやすいノートが完成する。生徒たちはプリントやノートの紙面を埋められたことで勉強した気になり、満足感が高い。しかし、これらの方法は個別学習がほとんどであり、英語の音声が入ることは少ない。

私が行ってきたのはこれとは反対に、ペア活動など生徒同士が協力し合って学習する方法であり、あくまで授業内では音声を中心として英語の音を生徒の頭に残す指導であった。英語が得意な生徒と遅れがちな生徒の差は、リーディングやライティングなど文字を介させる活動ではとても大きくなるが、音声を重視し、英語の音を頭に残す授業を行うと、大きな差は出にくい。

3.1 oral introductionで導入する

中学校で教科書の予習をさせることは多くないはずだが、高校では予習を求めることが少なくない。しかし、遅れがちな生徒には、一般的に予習をすることはなかなか困難で、授業でいきなり教科書を開けて本文を読ませても、ほとんどの生徒は自分で理解すること

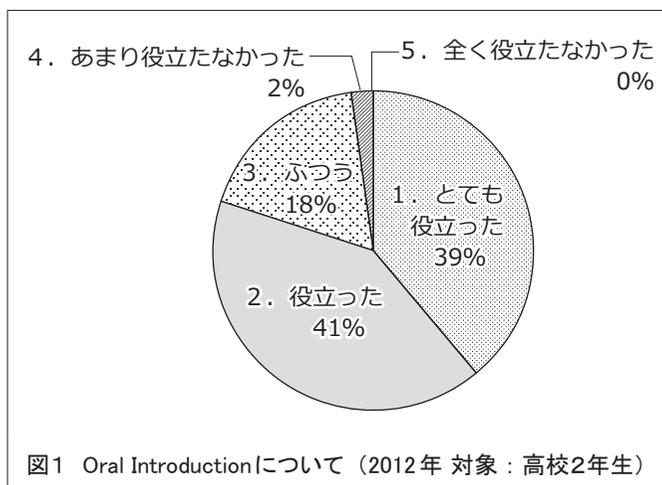
はできないはずである。

そこで、教科書を開本させる前に、教師が picture cards などを使いながら、本文の内容や背景知識を易しい英語で生徒に語りかける oral introduction が効果的になる。その際、visual aids は豊富に用意するとともに、キーワードは単語カードまたは板書で文字で示すことが鍵となる。最近、visual aids を映像で投影するなど ICT を利用することが多く見られるが、これは紙芝居と同じで画像がどんどん消えていってしまうのが難点である。その点、黒板では oral introduction のあとで生徒が黒板を見てストーリーを想起できるという一覧性が強みであり、こちらを是非薦めたい。生徒は visual aids の助けも借りながら、教師が行う oral introduction によって教科書本文について概略的なイメージをもつことができ、教科書を開いたときに得られた知識を活かして、ようやく自力で読めるようになるのである。高校生の声を聞いてみよう。

○教科書をいきなり読んでも分からないので、最初にやってくれることで大体の内容が分かるような気がしました。

○教科書を読んでもどんな話なのか最初はイメージできないので、開く前に写真で説明されるとイメージしやすい。

○頭の中でテストの時もその写真を想像してできた。



このように、生徒が自力で教科書を読むレディネスをつくるのが、教師による oral introduction である。oral introduction のあとに、教科書を開かせ、本文の概要を問う質問を2つ程度用意し、その答を見つけるために自力で読ませて、答に下線を引かせる（第一次読解）。その次に、教科書本文をフレーズごとに区切りながら、代名詞のさすもの、不規則動詞の変化などさまざまな発問をしながら、細かい読解作業を行う（第二次読解）。

3.2 英文のどこに生徒はつまづくのか

第二次読解において、全文訳などすべての英文について説明するのではなく、oral introduction で理解できていない箇所を中心に生徒に発問したりするなどやり取りをしながら日本語で説明を行う。その際、時間をかけすぎると生徒は集中できなくなるので、生徒がつまづきそうなポイントを教師が見きわめて、テンポよく進めていく。また、隣の生徒と確認をさせたり、辞書を引かせるなど一方的な説明にならないように配慮する。

ここでは、総合学科の高校1年生に対して、中学校2年生の教科書の一部を読ませた授業実践を振り返りたい。マザーテレサの生涯を扱った英文を生徒は以下のように読んでしまう。

○ Love begins at home. Smile at each other. Help each other. Then, more and more love will grow.

love : 愛する begins : はじめる home : 家

この3つの日本語の意味をつなぎ合わせて、「家を愛しはじめる」としてしまおう。

○ Our work may look big, but it is only a drop in the ocean. But if we stop this work, the ocean will be one drop less. 「海に落ちる」となってしまおう。

前者の場合、School begins at 8:40. を示し、「学校は8時40分にはじまる」となることを確認し、この英文を参考に Love begins at home. の意味をとってごらん、とすると何とか「愛は家庭ではじまる」という構造に気づいてくれる生徒が増える。また、後者に関しては、dropの前にaがついて a drop となっているから、drop は動詞、名詞のどちらかと投げかけ、「名詞」の答えをクラス全体で確認したあと、辞書引き（この高校では紙の辞書を一斉購入させていた）につなげ、「大海の一滴」という意味につなげる。

3.3 学習方法を教える

上で見たように、英語が苦手な生徒は、英単語の日本語の意味をつなぎ合わせて、本文を理解しようとする傾向がある。英文の構造を考えて理解することがなかなかできないのである。このような生徒が英語を読むときは、自分分かる単語の日本語の意味を下に書き込みながら読み進める様子が見られる。また、英語の文章の下に日本語で全文訳を書きながら読み進めている生徒を見かけることもある。これらの方法では、まとまった英文を一定の時間内に読み終えることはできない。「意味が分かっている単語の意味や、英文の意味は日本語で書かなくていいんだよ」というアドバイスを与えるだけで、生徒の読み方が少しずつ変わっていく。一方、進学校の生徒の中にはすべての英文に記号づけをしたり、SVOCの書き込みをしながら読んでいる生徒もいるであろう。このように、かたくなに自分流のやり方を貫き、それが原因で英語力が伸びない生徒もいるのである。授業中に生徒が個人で英語を読む活動をしている際は、机間指導をして生徒がどのように課題に取り組んでいるのかを観察し、改めた方がいいことは全体あるいは個別に指導をしたい。

4. 「英語の文を音読するのが難しい」→フレーズごとに prosody を中心に指導する

英語の文章の意味が理解できたら、音読をしていく。きちんと文字を音声化する段階から、徐々に負荷を与える音読活動を行い、話せるレベルにつなげていきたい。

音読が難しい生徒に対しては、①読みにくい語句にカナをふる、②1語ずつ練習し、それを2語、3語とつなげてフレーズでスムーズに読めるようにする、という対応も必要になってくるであろう。

授業内では、教科書本文にスラッシュが入っているプリントを使って、スラッシュごとになめらかに読めることを目標にする。遅れがちな生徒への音読指導では、/f/ /θ/ などの個々の音素を指導するよりも、prosody に重点を置く方が効果的である。accuracy の点では多少問題があったとしても、スラスラと英語らしいリズムとイントネーションで音読で

語の定期テストで点数がだんだんと伸びてくるということを実感してくれば、授業により積極的に参加する生徒が増えてくる。好循環である。

テストづくりで大切なのは、指導と評価を一体化させることである。例えば、語彙力を測る問題では日本語と英単語をマッチングさせる問いを出題し、授業でしっかりと練習していれば確実に答えられるという経験を生徒にさせたい。授業内で④のレベル、つまり単語を書く練習をしていないのに、試験でそれを出題すればできるのは上位層の生徒のみになってしまう。

○先生の授業は音読を中心としたものだったから、中学の時よりも単語とか読めるようになりました。教科書もスラスラと読めるようになったので、テスト前の勉強が少し楽になりました。そして、中学の時は英語の勉強方法があまり分からなかったけれど、先生の授業で何を勉強したらよいか分かりました。何を勉強したら点がとれるのか分かったので、2年もがんばる。

○中学の時まで英語が苦手だった自分がこんなに英語ができるようになるとは思いませんでした。高校も1学期は全然点がとれなかったけど、先生に補習をしていただいて自学ノートをがんばった結果、後期期末は平均点を超えることができました。学年末の難しいテストも70点台をとれて、とても英語力が身に付いたと思います。やっぱり自学ノートと flip and write が一番役に立ったので、2年になっても自分で続けていきたい。

6. 「文法が難しい」→discourseで提示し、生徒にuseを理解させる

ほとんどの高校生は文法が大切だと思っているが、授業で一生懸命教えても、問題演習を繰り返してもなかなか定着しない。ポイントは、

- (1) 自然な文脈の中で
- (2) シンプルに説明し
- (3) 何回も出会う中でつかませる

ことである。文法事項について、教師が生徒に分かるようにと説明すればするほど、生徒の集中力が続かず理解できなくなりがちである。

文法事項を含む英文は、1文単位ではなく、2文以上で提示することが大変重要である。2文以上の文脈でdiscourse(談話)は成立するためである。文法事項の指導には、form(形)とmeaning(意味)に加えて、use(使用場面、コンテキスト)の3要素が必要になるが、日本の高校では、場面設定のない1文単位での例文を示しながら説明したり、練習問題も1文単位のもの依然として多い。これでは文法事項が使われる使用場面が学習者に伝わらず、機械的な練習になってしまい、コミュニケーションに使える文法にはならない。

I lost my bike key yesterday. / I have lost my bike key.

のように1文単位で対比するのではなく、

I have lost my bike key. I have to go to school by subway today.

のように現在完了形が「今」とつながっている2文単位での例文を示し、例文に語らせる

と理解しやすい。

また、説明をする際も、現在完了形について「完了、結果、経験、継続」と細かく分類するのではなく、「今」のことも含むのだということをも文脈の中でつかませるうえで、「過去＋現在」とシンプルにまとめる。このように、useがよく分かる文脈を示せば、それに連動して説明がシンプルになってくる。

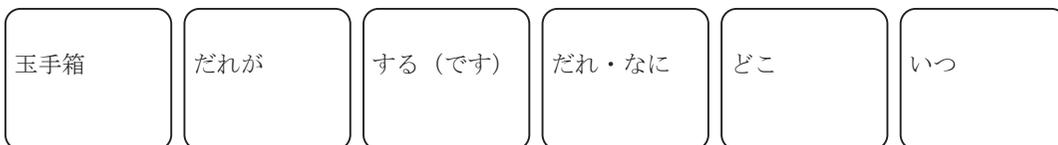
そして、よく出てくる文法事項については、その形や意味などをカードにして、ラミネート加工をし、裏にマグネットを貼っておき、それが出てくるごとに黒板に貼りつけて確認をさせる。繰り返しのためには、教師は当該の文法事項が使用している教科書の中で何回出てくるのかを調査しておく必要がある。そうすることで年間の指導の見通しができ、定着の時期に見当をつけることができる。

7. 「英語の文を書くのが難しい」→「意味順」とチャックシートを使う

2年生のライティング（現行カリキュラムの「論理・表現」にあたる）の授業を担当していたときに、沖縄への修学旅行後に英語で「修学旅行レポート」を書かせたことがある。ある中級レベルの英語力をもつ生徒が書いた文章の中に、“Grandmother made accessory a lot of bought.”という英文があり、とても印象に残っている。冠詞や前置詞の誤りなら、コミュニケーションを阻害することは少ないが、日本語をそのまま英語の語順に置きかえただけの英文は意味が通じない。このような global error を習熟度が高くない生徒が犯さないようにするにはどのような工夫が必要になるであろうか。

7.1 「意味順」を使って英文を書く

英語の語順を定着させるために試行錯誤をしながら、中間日本語を利用したり（英訳しやすいように日本語を英語の語順に並びかえて提示する）、日本語への記号づけなど様々な方法を試してきたが、生徒にとってもっとも分かりやすく効果的だったのは「意味順」による英語指導であった。「意味順」というのは田地野彰先生が考案されたもので、



「だれが／する（です）／だれ・なに／どこ／いつ」の順序で語句を並べていけば、英文の大枠が完成するというものである。最初にある玉手箱は「接続詞（that, if など）や疑問詞（How, why など）、疑問文で用いられる助動詞（do, can など）などを扱うために設けています。接続詞を用いた重文や複文の場合、玉手箱に接続詞を入れて、2段（以上）の意味順を用いて対応します」（田地野, 2021, p.6）とされている。高校では5文型を用いた語順の指導が今でも主流であるが、SVOCの記号や、目的語・補語といった文法用語が遅れがちな生徒を惑わせることが多く見られる。一方、「意味順」であれば文法用語を使わずに、各ボックスに入れるべき語句を考えながら英文を組み立てることができて、生徒にとってもやさしい。

前ページの英文を「意味順」で整理してみると、以下のようになるであろう。

玉手箱	だれが I	する (です) bought	だれ・なに a lot of accessories	どこ	いつ
玉手箱 (that)	だれが an old woman	する (です) (had) made.	だれ・なに	どこ	いつ

7.2 「チャンク」で英語を発信で使えるようにする

2.1では単語シートについてふれたが、英語を書けるようにするためには、「チャンク」(語句のかたまり)で英語を覚えるようにしていくと有効である。特に以下のような動詞を使ったチャンク(コロケーション)を使えるようにしておくと、その前に主語を置き、後ろに場所や時を表す語句を置くことによって、英文の骨格を簡単に作ることができるようになる。

語句のかたまりシート	
1. take part in that game	1. □□□ その試合に参加する
2. look for a job	2. □□□ 職をさがす
3. practice judo	3. □□□ 柔道の練習をする
4. do my best	4. □□□ 全力を尽くす

チャンクで英語を覚えることによって英語を話す、書く時などの発信時に使える可能性が高まることが期待される。その他に、中森(2009)は「日本語を使って分析的に指導するよりも、定型表現としてチャンクを活用することで学習者の負担を減らす。チャンクを構文知識として活用することによって、動詞や前置詞句の誤りが軽減される」(p.121)という利点をあげている。

以下は、教科書に出てきた場所を表す語句をチャンクにしたものであるが、年度の後半に使用することにより、年間のまとめにつながり、さらに上で紹介した「意味順」の「どこ」のボックスにそのまま使えるものとなり、非常に有用性が高い。

語句のかたまりシート (場所を表す語句)	
1. at the end of the hall	1. □□□ 廊下のつきあたりに
2. in the park	2. □□□ 公園で(公園の中で)
3. on TV	3. □□□ テレビで
4. at the school gate	4. □□□ 校門のところで

8. 英語を使う機会を与える

遅れがちな生徒が多い高校では、生徒の基礎学力を回復させるために、単語を覚えたり、基本的なドリルを繰り返したりということに力が注がれがちである。一方、生徒たちにまとまった英語を書かせたり、英語で発表させたりする機会はどうしても乏しくなる。指導に非常に手間と時間がかかるからである。しかし、年間に数回でもいいので、そのような機会を設けることで生徒の隠れた日常生活や能力に気づくことができ、生徒の相互理解も深まる。是非、他の教科担当の先生と協力をしながら生徒に英語を使う機会を年間指導計画に取り入れたい。

8.1 自己表現活動で「創造力」「想像力」を発揮させる

「文法事項を使って英文を書く力を伸ばす」のに有効な活動が「自己表現活動」である。まずは、教科書に出てくる文法事項を使って自分のことを1文で書かせるとよい。ただし、1文ではそれを書いた生徒の意図がうまく読みとれないことがある。一方、英文を2文、3文と増やしていくことは、遅れがちな生徒には負担になるため、英文の背景を日本語で書いて説明させることも有効な手立てである。

また、パラグラフなどまとまりのある文章を書かせる場合は、その一部を入れ替えるだけで自分のことが書ける適切なモデル文と、入れ替えるための語彙リストを用意しておくことでより多くの生徒が取り組むことが可能になる。

なお、生徒の作品は英語通信などに載せてクラスで読み合ったり、色上質紙に清書させ、教室の廊下や文化祭などで掲示して、作品の共有化をはかりたい。また、その際に遅れがちな生徒の作品を必ず載せるようにするのがコツである。自分の作品が取り上げられることは、大きな喜びにつながるはずである。

8.2 英語を発表させる機会を

私が最後に勤務した高校2校で、3月の学年末試験後の期間に「英語暗唱発表大会」を行っていた。この取り組みは、英語科主催の学年行事として位置づけていたが、スピーチ大会と異なり、遅れがちな生徒たちも音声面に集中すればよく、原稿を添削する必要がない英語教員にもやさしい企画であった。入賞するのは、筆記試験で高得点をとれる生徒とは異なることが多い。このように非日常的であり、かつあまり生徒に負担がかからない企画を用意しておくことで、生徒の思わぬ一面を再発見することができて嬉しい。

【参考文献】

- 中森誉之（2009）『学びのための英語学習理論—つまずきの克服と指導への提案』ひつじ書房
- 田地野彰（2021）『明日の授業に活かす「意味順」英語指導 理論的背景と授業実践』ひつじ書房